花をいけることの魅力を探り伝える研究

Design for convey the joy of "hanaike" culture

- 伊藤 望理香 Ito Morika 愛知県立芸術大学大学院 柴崎幸次研究室 Aichi University of the Arts
- キーワード:花、植物、花いけ、コミュニケーションデザイン、本、読み物

はじめに

昨年度の研究ノートに掲載した「いけばなマインドを伝えるデザインの研究」に引き続き、今年度は花をいけることそのものの魅力を探り、伝える研究を行った。本研究は、現代の人々が、自分に合った"花いけ"スタイルを積極的に見つけ出し、"花いけ"に喜びと価値を見いだすきっかけとなることを目的とする。本研究で、"花いけ"とは、花をいける行為そのものをさしている。生け花やアレンジメント、どちらにも属さない何気ない一輪挿しなど、あらゆる花をいける行為を総括して"花いけ"と呼んでいる「図1」。

研究内容は、(1)研究者が実際に花をいけ、その体験を考察すること、(2)日本の"花いけ"文化の調査と考察、(3) "花いけ"を楽しむ人々の話をまとめた本の制作と提示の3ブロックに分けられる。この研究ノートでは、主に(2)と(3)の活動について詳しく述べていく。

今日の日本では、伝統的な"花いけ"の様式「生け花」に加え、西洋の「フラワーデザイン」など、様々な花をいけるスタイルが個別の流派・系統のなかで大成されていると言える。一方で人々の暮らしにおいて、花をいける文化がどれほど広く一般的に親しまれているか、ということに研究者は疑問を持った。花は女性が触るものだというイメージや、「生け花」と聞くと敷居が高いイメージ、富裕層の楽しみというイメージなど、「花をいけること」に付随する様々な既成概念や形に囚われることによって、純粋に花をいけ、親しむ文化が希薄化してはいないだろうか。これらの疑問を念頭において、古代から現代までの日本における人と花との関係性の調査と、"花いけ"のワークショップを行い、修了制作「よむはな」につなげた。

1. 日本の花文化概略史

まず、古代から近現代までの生け花成立の流れを大まかに述べる。古代日本人は、異形の巨樹を精霊としてあがめ、さらに精霊が宿る媒体として直立した常盤木を立て、信仰の



図1 花いけの一例(ワークショップ参加者の花)

対象としていた。仏教伝来以降は、仏前に花を供える「供花」 という習慣がもたらされた。日本人が"花いけ"を始めた起源 は、当時の精霊や仏などの「神聖なもの」と結びついた、植物 との関係にあると考えられる「注1]。

その後、室内生活が定着するに従い、花は宗教性を離れ、 観賞物としてより身近となった。平安時代には、貴族が屋敷 に花を飾り、人を迎える趣向もあったという。室町時代になる と、書院造りの室内に座敷飾りが置かれ、花瓶には「たてはな」という花がいけられた。この「たてはな」を業とする専門家も表れ、彼らによってその形式が作られていった。一方、それとは異なる「数寄」という美に根ざした自由な形式の「なげいれ」という花も生みだされた。「なげいれ」は桃山時代になると千利休によって大成されたわび茶の世界で発展し、「茶花」となって成熟していった[注2]。

中世まで"花いけ"は強力なスポンサーの下で行われたプロの仕事であったが、江戸時代に入ると、豊かになった庶民も行うようになった。「たてはな」は、池坊によってさらに華やかな「立花」となって集大成をとげた。この「立花」を簡略化したものと「茶花」の二つを折衷した「生花」が誕生し、その盛行によって一般庶民も"花いけ"をたしなむようになった。「生花」が幾多の変遷をとげるなかで、数多くの諸流派が乱立し、家元制度も生まれた。細かな決まりごとを設けたので、教える側も習う人も解りやすくなり、明治以降は女性の間の教養や嗜みごととして奨励されるようになった。

スポンサーのいなくなった明治時代からは、一般の人々に花を教えて、その生徒たちにスポンサーになってもらうという形で、生け花文化は続いた。洋室にも合う様式の「盛花」というスタイルが小原雲心によって編み出され、生け花は床の間の他にも室内の様々な場所に飾られるようになった。昭和時代には、経済成長が女性の生け花への参加を促し、日本の生け花人口は特に高まったという。また、生け花をアートとして捉えた、純粋な植物造形による空間芸術とも言える"花いけ"が草月流を興した勅使河原蒼風らによって試みられるなどの、前衛的な活動も行われた。

生け花の歴史は、様式化した花が完成すると、それに反発して自由にいける花が盛んになり、その流行が進むと再び様式が現れる、ということを繰り返している。 興味深いのは、それぞれのスタイルが無くならずに継続するということで、現在はその結果として多種多様な"花いけ"の形が残っている。

2. 現代の花文化について

近年では、生け花は若者に人気がなく、たしなむ人は高齢化している。以下、先駆研究である今井孝司氏の論文「いけばなにおける沈滞要因の考察」から引用する。

1998年に生け花流派である小原流の機関誌「挿花」が、 渋谷駅前を歩く十代後半から三十代の女性124名に、生け 花に対するイメージをヒアリングした記事によれば[注3]、「良 くいえば伝統的、悪く言えば古くさい。実際に自分がやるに は、近寄りがたいが見る分には美しいし、心が和む」(21歳 OL 東京都新宿区)「着物、正座、床の間。大和撫子がやる もの」(25歳 OL 東京都中野区)「生け花それ自体上品で、 している人はひかえめで美しいイメージがある。外国人に好 まれそうな、日本の代表的文化でありながら、当の日本人に は遠い存在であるのでは」(18歳 予備校生 東京都小平 市)「すぐに連想するのは花嫁修業。やってみたいけれど機 会がなくて、なんとなく馴染みにくくなっている感じ。最近はガ ーデニングの方が身近になっている」(33歳 OL 東京都調 布市)などの発言があった。生け花の不人気は、ライフスタイ ルや住宅の変化、費用に対する不安、家元制度に対する敬 遠など、他にも様々な理由が考えられる。

一方で、戦後アメリカから伝わったフラワーデザインは、一般には生け花よりも手軽で簡単な習い事として、主に女性の趣味として広まっている。かわいらしく、淡い色のリビングルームやマンションにも良く似合う。花のもつ機能として、「贈る」「飾る」「育てる」の三つがあげられるが、主に「飾る」ことしかできなかった生け花に対し、フラワーデザインは「飾る」に加えて「贈る」こともできるという点から、花を通じたコミュニケーションの和が広まり、より花に関する楽しみが増えている。

そういった状況で、昨年度一般財団法人生花通信配達協会(花キューピットグループ)が、全国381件の花キューピットに加盟する花屋に対して行ったアンケート調査では、「花文化が希薄化していると思われますか」という質問に対し、半数以上の67%の店舗が「はい」と回答した「図2]「注4]。

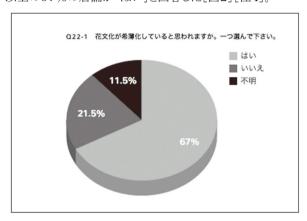


図2 アンケートグラフ

生け花やフラワーデザインに限らず、"花いけ"文化全体はいま、衰退化しつつあるのだろうか。これまで述べてきたように、生け花やフラワーデザイン、またそのどちらとも言えない、例えば一輪挿しのような花まで、"花いけ"の形は現代多種多様だ。情報は満ちあふれているようだが、逆に各個人のライフスタイルに合った、好みの"花いけ"を見つけ出すことが難しいようにも思える。特に、なぜ花をいけるのか、花をいけると何が良いのかといった、感性やマインドの部分はより見えづらくなっているのではないだろうか。そしてそのことが、上記の花文化の希薄化に繋がっている側面もあると考える。

3. ワークショップでの観察

実際のところ、人々は"花いけ"に対してどのような反応をしめすのかを観察するため、それぞれ異なる条件のワークショップを3回行った。そのうちの2つを述べる。

3.1. 平成こども塾でのワークショップ

今年度7月、長久手市の生涯学習施設「平成こども塾」で行われた、ART&LIFE 宮崎喜一氏のプログラム「道具作りと料理講座」の中の一枠として、"花いけ"ワークショップを行った[図3]。プログラムに参加していた約30人の、4才から12才までの子供達を対象とした。"花いけ"の時間としては15分から30分程度である。

当日のテーマは「お茶会」で、宮崎氏のプログラムは、午前 中は木と竹で菓子楊枝などを制作し、午後からは和菓子を作 り、最後に抹茶と一緒に頂くという行程であった。抹茶を頂く



図3 子供達がいける様子

段階で、4班ある各テーブルのしつらいとして子供達に花をいけてもらった。花はカシワバアジサイ、キキョウ、アザミ、サンキライ、ノウゼンカズラ、ササ、アジサイ、ムクゲなどで、施設の庭や長久手周辺から採取したものを事前に用意した。器は直径約40㎝高さ約20㎝の竹籠の中に、水の入った高さ約20㎝の青竹を入れて花入れとしたものを各テーブルの中央に置いた。道具はクラフトばさみを使用した。

班に置いた一つの籠に、班のメンバー5、6人で協力していけてもらう形で、"花いけ"を始めた。ほとんど何も言わずとも、自発的に子供達が花バケツに集まり、花を集めていけ始めた。時間がたつと、取り組みの熱心さに個人差がでた。また、こちらから指導はせず、促す程度にした。

開始10分後には、班によって全く異なった花が出来上がった。活動的な男の子がいる班の花は、大きな枝やササが高く大胆に立てていけられていた。また、女の子ばかりの班はキキョウやムクゲ、アジサイなど、花の部分が目立つものばかりが低く寄せていけられ、かわいらしく華やかであった。班全体の雰囲気もあるが、班のなかで特に熱心に取り組んだ、一人か二人の子供の個性や好みが強く出ているのではないかと推測する。

室内や、その時の状況、花、器などの環境がそろえば、子供達は比較的、積極的に"花いけ"を楽しんでいたということが興味深かった。

3.2. 大学でのワークショップ

今年度6月、本校大学内において、10人の生徒・先生を対象に"花いけ"ワークショップを行った[図4]。10人のうち9人が女性、1人が男性である。場所は野外の壁を背景にしたテーブルで、器は高さ20cmから30cmほどの籠や瓶など15個あまりを事前に用意した。花は全て大学内で採取したものを扱った。あらかじめ採取しておいたアジサイに加え、当日参加者個人で採取しに行ったものを合わせて使った。ヤブガラシ、ヒメジョオン、ネジバナ、ノブドウの蔓、ヘビイチゴ、枯れ草などの野の植物を好みで採取していた。その後用意した器から好きなものを選び、自由にいけてもらった。時間は一人30分から1時間程度で、最後にアンケートに感想をもらった。

感想には、「自分で採った花を考えながらいけて、完成した時の達成感やスッキリした気分が気持ちよかった。初めてだったが、またいけてみたいと思った」「初めてだったが予想以上に楽しかった」「花選びから再構成するのが、自分の庭

を作るようで面白かった。おだやかになった気がする」「大学に生える植物たちのことを見直した」「リフレッシュできた」など、肯定的な反応が多かった。また、いけた後の気分を聞く項目では、「ふつう」「少し良くなった」「まあまあ良くなった」「とても良くなった」「かなり良くなった」の5段階のうち、全員が「とても良くなった」あるいは「かなり良くなった」に丸をした。"花いけ"の癒し効果やリフレッシュ効果が顕著に現れていると考えられる。

また、いけられた花を観察すると、各個人の"花いけ"スタイルの好みがそれぞれによって違っていることが分かった。花束のように華やかで可愛らしい色の花を好む人や、渋く日本的な表現を好む人、デザイン的な表現の人、西洋的で、かつ素朴な表現を好む人など、好みは細かく現れていた。あくまで推測にすぎないが、"花いけ"を体験する以前か、あるいは体験しながらか、どこかの段階で「こういう雰囲気が良い」という"花いけ"のスタイルが、個々人のなかでそれぞれ確実に生まれるのではないか、と考える。





図4 上/採取する様子 下/いけている様子

4. 修了制作「よむはな」について

ワークショップなどのきっかけがあり、ひとたび"花いけ"を体験すれば、それが有意義であるということは実感できるが、問題は日常生活でそのような機会が少ないことである。また、個人の中で好みの"花いけ"スタイルは潜在的に存在しても、それに合った"花いけ"は実際どんなものなのか、どのようにすれば習得できるのかといったことは、情報過多の現在で逆に情報不足の状態なのではないだろうか。「はじめに」で述べたように、"花いけ"に付随する様々な既成概念や形に囚われて、"花いけ"が近寄りがたいものになっている場合もある。

いずれにしろ最も大事なことは、"花いけ"をすると何がうれしいのかといった、感性の部分を伝えることである。

以上のことから、修了制作では、"花いけ"に対するイメージをさらに自由なものへと変え、感性を伝えるために、一般の人々の自由な花との生活を綴る「よむはな」という本の制作を行った[図4]。人々のストーリーを通じて、"花いけ"の楽しみへの共感を呼びかけることが目的である。

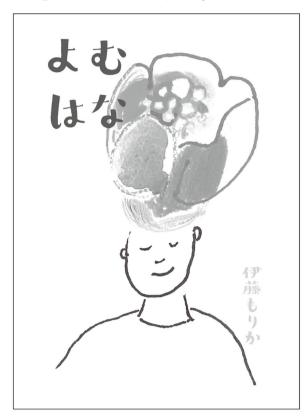


図4 よむはな表紙イメージ

4.1. 取材対象について

日常生活で、あるいは仕事として"花いけ"を楽しむ男女合わせて7人の一般の人物に取材を行った。日置奈津美氏(20代イベンター)、みーちゃん(幼児のため愛称、2歳保育園児)、厚見美幸氏(60代いけばな講師)、服部美穂子氏(40代主婦兼デザイナー)、上野雄次氏(40代花道家)、福森雅武氏(60代陶工)、御子柴由里子氏(30代陶芸家兼カフェ従業員)である。平均すると40代から70代の人が多いが、若者や子供のケースも入れてばらつきを出した。それぞれの人物の"花いけ"スタイルも、生け花やフラワーデザイン、どちらとも言えない素朴なものなど様々である。

4.2. 本のデザインについて

本は A5サイズ、一人につき6ページから8ページで記事を まとめた。各記事の扉には、右ページに氏名と顔写真、左ページにその人がいけた花の写真をレイアウトした[図5]。内容 部分は、文字が多いので内容の心象を伝えるイラスト[図6] を挿入し、読み手が読みやすくイメージしやすいデザインに した。

文体の雰囲気はエッセイのような柔らかい表現で、その人物にとっての「ふつうの日常」を表現するよう心がけた。イラス



図5 写真ページイメージ



図 6 イラストイメージ

トは、マジック、色鉛筆、水彩絵の具などを使って B4サイズ の画用紙に描いたものをPhotoshopで補正などして使った。 読み物なので、落ち着いて読めるよう全体の白地のバランス に気をつけてレイアウトした。

おわりに

「よむはな」では7人の多様な人物に会い取材を行ったが、 "花いけ"を喜びとする人々の中には他にも色々な楽しみ方 をする人が存在し、そこにはその人それぞれの、花への思い があるだろう。「よむはな」の検証も含めて、今後も取材活動 を続け、そのような人々の感性を伝えることで、「花をいけること」を身近にし、魅力を探っていきたい。

注、引用

- 1) 今井孝司、「いけばなにおける沈滞要因の考察」、京都 精華大学紀要 / 京都精華大学紀要編集委員会 編、 2000-2003 年、117p から引用。
- 2) 川瀬敏郎、「英語で「いけばな」」、講談社、2000年、28p
- 3) 今井、同上書、116pから引用
- 4) 一般財団法人 日本生花通信配達協会、「2013 年度 JFTD 白書」、2013 年、28p